

1. 植物とともに暮らす家 老いを支えるライフスタイル

植物の世話と手入れが、日々の活動の一部に自然に取り込まれる機能性と空間をプログラムした。

既設温室の飛び地のような場所を母屋の中に設け、この場所を核として、各室が呼吸する平面計画となっている。

竣工後1年、緑はますます増殖するかのようには広がっている。一連の作業は適度な運動を促している。生活のリズムと応答しながら緻密に計画された建築は、家具、備品までを作り込むことによって、創発的、活動的なライフスタイルを誘発し、実現している。

2. 温室の活用、エネルギーの補完と風のコントロール

洋蘭の既製温室と白いサンルームを設備的に接続、エネルギーと空気環境を補完している。

温室とサンルームをヒートチューブ（埋設ダクト）で結び、ファンとセンサー（温度+ガス）を設置。ジャンクションボックスを鉄製として輻射効果を持たせている。

冬期：温室の廃熱を土中のダクトとファンによって送風し、母屋内サンルームに温室と同質の環境をつくり出している。

夏期：温室内でおこる対流を利用してサンルームの空気を誘引し、穏やかな空気の流れをコントロールしている。

3. 県産材のスギと土ディテールの機能性と装飾性

県産材のスギを使用した内外壁は、繊細なディテールをもち、空間のスケール感を広がりのあるものとする。

60mmの厚さをもつ土壁との組み合わせで、調湿性を有する呼吸する壁面を実現、内壁スギのサロンは乾いた透明感をもつ、一方、内壁土壁の寝室は、一定の湿度と安心感のある静謐な場所となっており、エネルギー効率も高く省エネ効果も得られている。土壁は、割り竹下地を地場技術を生かして開発。県産材スギの活用は林業の活性化を促すとともに、森林資源の循環にも寄与している。

4. 地域の仲間が集うサロン セミパブリックなデザイン

植物を介した地域でのコミュニケーションの可能性は、鑑賞、手入れ、話題づくりと多岐にわたる。覗いてみたくなる室礼と親しみの持てる表情を地域由来の土を使用した「土塀」で実現した。（同時に暮らしの安心感も得られる）

小さな美術館のような「街に開かれたアプローチ」、広さ、気積ともにゆったりとした「土間エントランス」高い天井をもちサンルームに開かれた「サロン（リビング）」空間など、各場所がセミパブリックな雰囲気を持ち、多くの来訪者に開かれた空間となるよう構成した。小集団の育成を促す。

沖野上 温室の家

敷地は良質な住宅地、60代の建て主が、ご主人/故人から受け継がれた洋蘭や長く親しんできた植物とともに活動的に暮らす家。60歳からの20年間の暮らしがテーマ。

人と植物、人と素材/建築と一緒に暮らす空間を提案。

洋蘭の温室と白いサンルームを設備的に接続し空気環境を補完している。

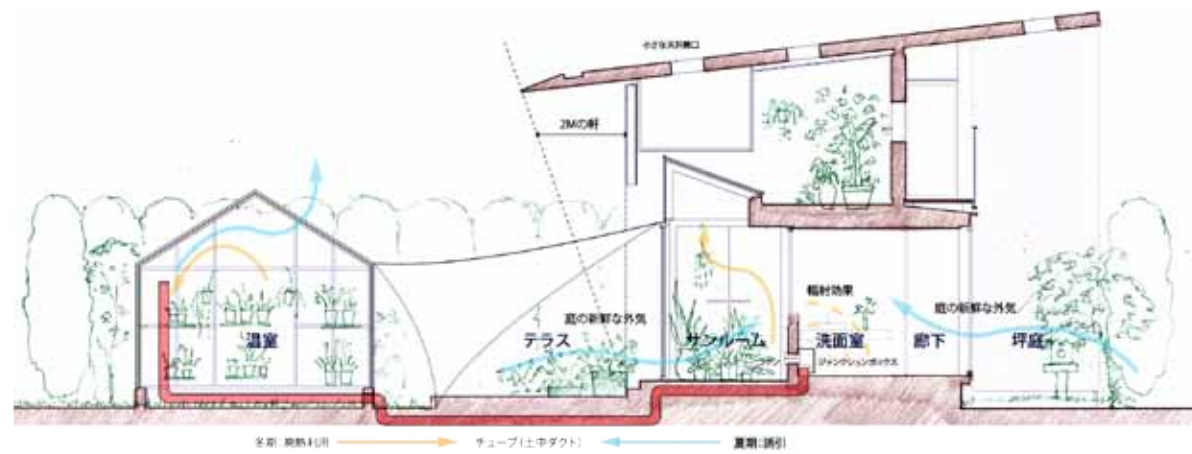
表と裏の概念をもった壁面が、暮らしに応じた場所を囲み、その上に薄い紙のような屋根がかかる建築構成。



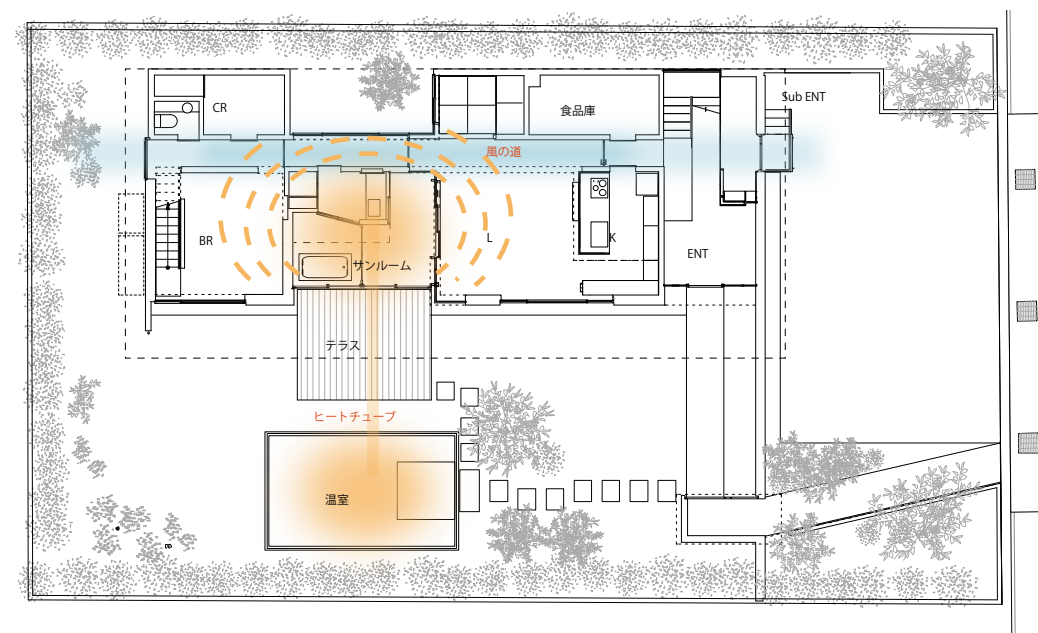
土中ダクトで結ばれた温室と母屋



リビング/サロンから温室とつながるサンルームを見る



温室と母屋が補完し合う断面構成



1階平面図



植物や素材が入り込む段差の無い「土間エントランス」



県産材のスギを使用した内壁(上)
地場の土と技術で実現した厚60mmの土壁/割り竹下地(下)



目隠しと採風をかねた「道路側スクリーン」



中秋の月を楽しむ「観月の集い」(上)
坪庭に室礼られた「お正月飾り」(下)

沖野上 温室の家	工事着工	2011年11月
用途 専用住宅	竣工	2012年9月
家族構成 単身独居	設計監理	加藤詞史/ 加藤建築設計事務所
敷地面積 515.49㎡	設備設計	テーテンス事務所
建築面積 149.544㎡	施工	鈴木工務店
延床面積 177.81㎡	家具	藤原木工所
構造規模 木造2階建		
高さ 6.096m		